# 「飴っこ」・「飴ちゃん」・「Bombonica」の指小辞

櫛　引　祐希子

## 1．指小辞

大阪では飴のことを「飴ちゃん」と言う。東北では飴のことを「飴っこ」と言う[注1]。飴一つとっても、地域によって言い方が違う。

さて、「飴ちゃん」と「飴っこ」で使用される「ちゃん」と「こ」は、言語学では指小辞（diminutive）と呼ばれる。指小辞について『言語学大辞典』（三省堂）を引くと次のような説明がある。

> 名詞・形容詞・副詞に特定の接辞を付けて、それらの語のさす事物の寸法・度合いがごく小さいこと、または、その表す性質・程度が軽少・微弱であることなどを意味する。口語や俗語で、愛らしさの強調や、愛着や親密さ、またはその逆に軽蔑や侮辱などの情緒的表現として用いる場合が多く、多数の言語にその例がある。

ここで述べられているように、指小辞は＜小ささ＞、＜少なさ＞、＜微弱さ＞、＜愛らしさ＞、＜愛着＞、＜親密さ＞、＜軽蔑＞、＜侮辱＞といった多様な意味を表す。たとえば、東北方言の指小辞「こ」は、次のように使われる。

●犬っこ…小さい犬。子犬。可愛い（と感じる）犬。
●花っこ…花のこと。しかし背の高い花（ひまわりやコスモス）には使わない。
●手っこ…小さな手。大人から見た子どもの手。男性からみた女性の手。
●鍋っこ…比較的小さな鍋。大勢で囲むような大型の鍋には使わない。
●熱っこ…微熱。深刻な熱には使わない。

●雨っこ…降り始めの雨。少量の雨。大雨や台風には使わない。
●先生っこ…経験の浅い先生。未熟な先生。先生を侮辱する言い方。

このように指小辞「こ」が付加されると、その前の語構成要素（語基）が意味する対象の特徴が限定される。指小辞のこうした特徴を考える上でSchneider（2003）の示唆は参考になる。

> As word class is also retained in the process of diminutive formation, it has been suggested that this process should be classified as modification rather than derivation proper.（p6）

つまり、指小辞と呼ばれる接辞は派生（derivation）というよりも修飾（modification）に分類したほうが適切ではないかということである。たしかに、指小辞が付加して語基が表す対象の特徴が限定されるということは、指小辞が対象の特徴を修飾したということでもある。

西原・南條・豊島（2005）は、指小辞が厳密な意味で派生辞とは異なるものであると考える根拠を二つあげる。一つは、指小辞は付加した際に語基になる語の品詞を変えないということである。一般に派生辞は「高い＞高さ」「春＞春めく」のように品詞転成の機能を持つ。二つ目は、派生接辞に見られる繰り返し性（recursiveness）が指小辞にはまれにしか見られない点である。繰り返し性とは、ある形態を語の構成要素として使用する数の上限を原理的に決められないということである。

東北方言の指小辞「こ」の場合、品詞転成の機能がないとは言い切れない報告がある。岩手県平泉の方言を調べた小松代（1954）は「ショッペァ（塩味が濃いことを意味する）」や「ンメァ（美味しいということを意味する）」という形容詞に指小辞コがついた「ショッペァこ（塩辛い食べ物のこと。特に味噌漬け大根や漬物のこと）」や「ンメァこ（甘い食べ物やお菓子のこと）」を紹介している。どちらも形容詞が指小辞によって名詞に転成した例である。だが、東北全体で見れば、これはかなり希少なものだろう。

次に繰り返し性についてだが、指小辞「こ」が付加する語基はあまたあり、一見すると繰り返し性があるように思えるが、次に述べるように指小辞が付

加するには一定の原理が働いている。先に引用したSchneiderは、こう述べる。

> Using a diminutive, e.g. *mousie*, implicitly refers to this norm. The referent of this diminutive form is compared to a class member of prototypical size and represented as smaller than average, as undersized, or as falling short of this norm. (p11)

指小辞が使われるとき参照されるのは、一般的に標準と考えられている状態（主に大きさ）である。「mousie」と呼ばれる「ねずみ」が標準的なサイズの「ねずみ」よりも小さいように、東北方言の「ねずみっこ」も標準的なサイズの「ねずみ」より小さい「ねずみ」である。「犬っこ」「猫っこ」も同様である。つまり、指小辞は標準的なサイズよりも小さいと判断された対象を表現するときに用いられる。しかし、その判断基準には個人差がある。さらに言えば、櫛引（2014）で指摘したように、その判断の許容の程度には地域差がある。この地域差には、「こ」という語がたどった歴史的変化が反映されていると考えられる。

ところで、指小辞「こ」の意味は、対象の＜小ささ＞だけを表すわけではない。前述したように、＜少なさ＞、＜微弱さ＞、＜愛らしさ＞、＜愛着＞、＜親密さ＞、＜軽蔑＞、＜侮辱＞といった意味も表す。

指小辞がこれだけ多様な意味を表す理由には、小さきもの（物／者）に対する人間の認知のありようが反映されている。―小さいものは量が少ない。小さいものは程度が弱い。小さいものは可愛い。だから小さいものに愛着が湧き、親密さも感じる。しかし、小さいものは能力がない。だから小さいものを軽蔑したり、侮辱したりもする―。このように、「小さい」ということから連想される様々な事柄が指小辞の意味を拡張させたと考えられている。

しかし、上で取り挙げた以外にも指小辞には重要な特徴がある。次節では「飴っこ」「飴ちゃん」を例に、この点について述べたい。

## 2．緩衝表現としての指小辞

前節で指小辞「こ」の意味について述べたが、では「飴っこ」の「こ」はどのような意味を有するのだろうか。「飴っこ」を使う宮城県在住者（70代２名）に尋ねたところ、このような回答があった。

①飴玉のこと（棒付の飴や水飴のことは言わない）

②誰かに飴をあげる時（主に子どもに対して）、もしくは誰かから飴をもらう時によく使う

注目されるのは、この回答が「飴ちゃん」を使う関西の学生たちの回答と重なる点だ。飴は飴でも、水飴や棒付きの飴ではなく、手のひらにのるサイズの飴で、一口で食べられる飴ということである。こうした特徴を持つ飴が東北方言の「飴っこ」であり、関西方言の「飴ちゃん」なのである。つまり「飴っこ」と「飴ちゃん」には、対象の＜小ささ＞を表す指小辞の意味が反映されている。

しかし、②の条件は、こうした指小辞の意味とは別のレベルの問題である。もちろん、「飴っこ」や「飴ちゃん」は方言であるから地元の言葉ならではの表現効果というものもあるだろう。だが、実は②の条件こそ、指小辞の運用を考える上で外せないポイントである。というのも、指小辞には緩衝表現（hedge 表現）としての働きもあるからだ。緩衝表現というのは、対話における配慮表現の一種で、発話をやわらかくして相手の領域や面子をいたずらに脅かさないようにする表現である。東北方言の「お茶っこ」は、緩衝表現としての指小辞を理解する好例である。たとえば「お茶を飲もう」と誘うとき、「お茶、飲むべ」と言うよりも、「お茶っこ、飲むべ」と言うほうが丁寧な印象を相手に与える。指小辞「こ」が付加されることで、オブラートに包まれた誘いの表現になるのである。

「飴っこ」と「飴ちゃん」が、誰かに飴をあげる時に、もしくは誰かから飴をもらう時によく使われるというのも同様だろう。物の授受をおこなう際、相手の心情を無視した一方的な授受ではなく、授与者と享受者が互いを思いやる円満な関係であること（あるいは、それを築こうとすること）が望まし

い。緩衝表現としての指小辞「こ」や「ちゃん」は、そうした両者の関係を維持する（あるいは、構築する）ための表現として機能しているのである。

## ３．ルーマニア語の指小辞

さて、ここで日本から離れて海外に目を向けてみよう。１節でも触れたが、指小辞は世界中にある。イタリア語もロシア語もそうだ。アフリカのガーナやトーゴで用いるエウェ語については詳細な研究がある。英語にも指小辞はある。そして、ルーマニア語は中でも指小辞が発達した言語として有名である。

そのルーマニア語に、まさに「飴ちゃん」「飴っこ」に通じる表現がある。「bombonica」（飴は「bomboana」）がそれである。

ルーマニア大使館に問い合わせて聞いたところ、親切に色々教えてくださり、ルーマニア語の指小辞の特徴をいくつか知ることができた。

ルーマニア語の「bombonica」は、大人が子どもに対して使う、もしくは大人が子どものために飴を買ったり、子どもの代わりに注文したりするときに使う。これは前節であげた②の条件と重なる。ただし、ルーマニア語の場合は、あくまで子ども目線での使用が肝心だそうだ。

では、大人は自分の言葉として指小辞を使わないのかと言えばそうではない。たとえば、指小辞がついたワイン「vinuleţ」（ワインは「vin」）は、こんな言い方で用いられる。

▲寒いので家に着いたらスパイスの効いた温かいワインを作りましょう。
▲お祖父さんが田舎で作るワインは世界一です。

このように、好きなワインを語る時や懐かしい思いに浸った時に、指小辞を使うそうだ。こうした例だけでも、ルーマニア語の指小辞が対象への＜愛着＞や＜親密さ＞を強く表すことがわかる。

もちろん、日本語とルーマニア語を対照するなら、ルーマニア語の男性名詞、女性名詞、中性名詞の存在に注意する必要があり、単純に日本語と対照させていくことはできない。しかし、それでも両語の指小辞には、日本語とルーマニア語という言語的な違いを越えた普遍性が見いだせる。

たとえば、ルーマニア語の指小辞も東北方言のように添加する語をあまり選ばない。だから、たとえば「porc（豚）」を「purceluş（子豚）」、「carte（本）」を「carticica（小さい本）」と言うことができる。そして子豚の「purceluş」や小さな本の「carticica」は、対象の＜愛らしさ＞も意味する。こうした指小辞の特徴は、東北方言の指小辞「こ」にも見られる。たとえば、「犬っこ」は、その犬のサイズ的な小ささだけでなく、話者の犬への＜愛着＞や、その犬の＜愛らしさ＞も表す。

一方で、ルーマニア語にも指小辞が付かない言葉がある。大使館の話によると、テレビ、電話、新聞などには使わない。実は、これも東北方言と同じである。東北方言の話者の内省によると、「サイズを気にして話題にするような物ではなく、愛情を感じるようなものではないから」といった答えが返ってくる。ルーマニア語の話者の場合はどうかわからないが、愛情を感じにくい対象であるという点が、指小辞が使用できない理由を解く手がかりになるかもしれない。

## 4．飴は飴でも…

２節で話題にした緩衝表現も、東北方言に限らず複数の言語の指小辞で確認されており、緩衝表現としての指小辞は＜小ささ（SMALL）＞を表す意味から派生したと考えられている（Jurafsky：1996）。つまり、「飴っこ」「飴ちゃん」「bombonica」のように飴に指小辞をつけて用いる理由には、国や地域を超えて共通する人間の小さきもの（物／者）への認識のありようが関係していると考えられる。

だとすれば、なぜ日本語の共通語では「飴っこ」「飴ちゃん」という言い方をしないのかという疑問が生じる。指小辞「こ」も「ちゃん」も共通語の基盤となった関東方言の語彙の中に語として存在しているにもかかわらず、関東では飴のことを「飴っこ」や「飴ちゃん」と言わない。

関東方言にも指小辞「こ」はある。「隅っこ」「端っこ」「根っこ」の「こ」や「江戸っこ」「浜っこ」の「こ」などがそれである。これらは今や共通語として全国的に使われている。前者はほぼ意味がないという無意味形態素（宮島：1973）として扱われ、後者は「こ（子）」の意味を残した指小辞と

して位置づけられている[注2]。

Jurafsky（1996）や Heine and kuteva（2002）にあるように、世界で使用されている指小辞の多くが「CHILD → SMALL」という意味変化を起こしたとされている。日本語の場合、「CHILD → SMALL」という変化は歴史的に中央語で生じたが、「SMALL」を表す意味から異なる複数の意味が派生した変化は近世の関東方言で確認できる。先に挙げた「隅っこ」や「江戸っこ」などの「こ」がこれに当たる。そして、そこからさらに指小辞「こ」の変化が進んだのが、東北方言（主に北奥方言）であると考えられる。別の言い方をすれば、指小辞の変化が最も進んだ東北は、その結果として多様な意味を表す指小辞を獲得した。緩衝表現として使われる「飴っこ」の「こ」もそうした変化で生じたものである。一方、東北ほど指小辞の変化が進まなかった関東では、「飴っこ」というような言い方は成立しないのである。

以上は指小辞「こ」に限定した説明だが、では関西方言の「飴ちゃん」の「ちゃん」についてはどう考えればよいだろうか。

なぜ飴に「ちゃん」を付けるのか。この問題について考えるには、指小辞「ちゃん」の歴史的変化（接尾辞「さん」からの形態変化と意味変化）を追う必要がある。

本稿では簡単な説明にとどまるが、おそらく「さん」が「ちゃん」へと形態を変化させるのにしたがい、本来「さん」が有していた敬意が逓減、対象への＜愛着＞や＜愛情＞を表すようになったと推測される。この変化を考えるには、「お芋さん」「お豆さん」のように食べ物に「さん」を付ける言い方が関西に多いことに留意する必要もあるだろう。

こうしてみると、たかが飴でも、飴に「こ」や「ちゃん」といった指小辞が付加される背景には、言語のダイナミックな意味変化や形態変化があることに気づかされる。そして、指小辞の使い方に地域差があるということは、その言語変化に地域的な違いがあったということを示唆する。では、その地域的な違いが生じる過程や要因は何か。この答えを導くことは容易ではないが、指小辞研究を続けていく限り追究しなければならないことは間違いない。

謝辞：執筆にあたり、ルーマニア大使館のシルヴィア・チェルケアザ（Silvia CERCHEAZA）様にお世話になりました。深く御礼申し上げます。

＜注＞

1．東北地方では地域によって、指小辞「こ」の前に促音が挿入されることがある。これは、「こ［ko］」の子音の破裂音［k］の直前の無音状態が一拍分に相当する時間を持つことによる。

　なお、東北地方のなかでも山形と福島は、指小辞の使用が盛んではない地域として知られており、指小辞の前の促音化も北奥ほどは確認できない。

2．東北方言の指小辞「こ」は平板化形態素として語基に結合すると、語全体のアクセントを平板化させる。たとえば、「鍋」は「ナ´ベ」と一拍目のアクセントが高くなるが、指小辞「こ」がつくと、「ナ ベ ッ コ」と平板になる。しかし、共通語（関東方言）の指小辞「こ」の場合、語全体を平板化させることはない。

＜引用文献＞

櫛引祐希子（2014）「東北地方における指小辞「コ」の地域差」『第98回 日本方言研究会発表予稿集』日本方言研究会

小松代融一（1954）『平泉方言の研究』岩手方言研究会

西原哲雄・南條健助・豊島庸二（2005）「接辞付加の順序付けの普遍性をめぐって―語彙化に基づく分析―」大石強・西原哲雄・豊島庸二編『現代形態論の潮流』くろしお出版

宮島達夫（1973）「無意味形態素」『国立国語研究論集４　ことばの研究４』

Heine, Bernd and kuteva,Tania.（2002）*World Lexicon of Grammaticalization*. Cambridge：Cambridge University Press.

Jurafsky,Daniel.（1996）Universal tendencies in the semantics of the diminutive. *Language* 72；3：533-578.

Schneider,Klaus.P.（2003）*Diminuitives in English*. Tubingen：Max Niemeyer Verlag.